
ネギまの世界で大暴れする主人公

怒羅魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまの世界で大暴れする主人公

【Nコード】

N7599Q

【作者名】

怒羅魂

【あらすじ】

これはおかしな物語

おかしなほどチートな物語

作者は文才がない上に原作を持っていませんのであしからず

ブローグ

ざーんーこーくーな天使のよおーに♪

着信があつた

知らない番号だ・・・

何だよ今から自殺すんのに
しょうがないから出てやるか…

「はい・・・もしもし・・・」

「もしもし？おれおれ」 今からお前死ぬから死因なにがいい？
」

わけわかんねー！今から自殺すのに死因なんてしらねーよ

「おーい！はーやーくー」

うるせーなー

「はやくし」「安楽死でおねがいします！これでいいか？」「うん！
問題ないよ！」

・・・いきなり電話が切れた

あれ？どんどんまぶたが重くなっていく…

・・・目が覚めたら真っ白な空間にいた

「あ！おきた〜？」

目の前にはすごい美少女が！あれ？この声どこかで聞いたような・

「いやゝ美少女だなんててれるなゝ

あと聞いたことあるのは当然ですよさっきの電話私ですもん」

・・・OK心を読まれたことに関してはスルーだ
なんですか？あの電話は？

「あれは死ぬはずの人に対する救済処置っすよ
寿命って言うのはこの電話がかかってくるまでの時間なんですよ」

なるほどつまり俺はあれで寿命だったんだな
あれ？俺自殺しようとしてたのになんであのタイミングで？

「そりゃあもちろんミスですよ！
ほら良くある転生ものみたいに神様のミスって言うやつです！
ちなみに私は天使です！」

ということは俺も転生できるということか！？

「YES！！頭がよくて助かります！！」

来世ではいじめられない？

「・・・（おも！悩みおも！）だ・大丈夫ですよゝ
イロイロ特典付きますし

来世はネギまの世界ですし
ある程度は許容されますよ！！」

よかった

特典って何が付くの？

「それはですね」

- ・魔力 このかの30倍 気 ラカンの30倍
 - ・ありとあらゆる才能（もちろん魔法・気もこみ）
 - ・神話上のすべての物の召喚（生物も可）
 - ・生まれる時代は選択可
 - ・最強の頭脳
 - ・瞬間記憶能力
 - ・完全記憶能力
 - ・身体能力最強
 - ・すべての武器・武術を達人級まで使いこなせる
 - ・めだかボックスの異常・過負荷すべてを使える（随時更新）
 - ・限界突破（サイヤ人のように無限に鍛えることが出来る）
- その他もろもろ・・・」

チートだー！

でもありがと

生まれるのは明日菜たちと同じぐらいでお願い
原作開始と同時に男子校から転校って感じで

「はいはい

了解しました」では行ってらっしゃーい」

またまぶたが重くなっていく・・・

HAHAHA 俺に逆らうとは・・・30年遅いわー！

はいどうも前回転生したものです

名前は上下山^{かげやま} 虎雄^{とらお}に決まりました

両親は魔法使いでまほらの中でそこその地位を持っていましたが・
・

俺が生まれたのと同時に失踪&行方不明

俺は孤児院に送られました

あと学園長にもあったがいきなりだっこしてきたので思いつきひ
げをひっぱってやりました

そうしたら

「フオ！力強いの・・・のおそろそろ放してくれんかの？いたい
んじゃgいたつ！

余計にいたくなつたぞ！いたいいたいいたい！」

ざまー

原作でも気に入らなかつたんだこいつ

ちなみにこの孤児院はいたって普通の孤児院で魔法とは関係ありま
せん

後書くことはいろいろと恥ずかしかったと記しておこう／／／
(特に授乳など)

どうも！虎雄4歳です！

あれから学園長とも交友を持っています

まだ魔法については何も言われませんが・・・

まあそこは置いといて

いま孤児院の人（若い男の人のなので・・・フヒヒ）のパソコンを
いじってる

・・・天使様？最強の頭脳ってハッキングなんかも余裕なのね？あ
つさりFBIのサーバーにいけちゃったんだけど・・・

さて計画を立てよう

まず決定事項は

- ・ 攻略対象は千雨＆朝倉
 - ・ 千雨のいじめは止める
 - ・ 麻帆良で警備員はするが正義なんかに興味はない
 - ・ 薬味はうざいからアンチで
 - ・ エヴァに闇の魔法を教えてもらう
- ぐらいかな？

千雨は普通にいじめをやめさせればいいし

朝倉は新聞部にいけばいい

そのためにはまだ早いからいいや

それまでは格闘技でも極めるか・・・

一年後・・・

格闘技はあらかた極めたし新しい流派も作った
今日は学園長に呼ばれている
おそらく魔法についてであろう

コンコン

「入るぞージィちゃん」

「うむ すまんの呼び出して」

中に入るとぬらりひょんこと学園長とタカミチ、ガンドルフィーニがいた

「何の用だよジイちゃん」

「うむ、あのな虎雄・・・この世界には魔法というのがあるんじゃないよ」

「知ってるしww」

「」「」「え？」「」「」

「だってみたことあるもん
なんか光ってる矢みたいなものとか何もないところから炎が出たり・
・・」

他にもいろいろいつてやった

「わ、わかってるのならいいんじゃない
そしてな？おぬしには膨大な魔力があるんじゃない
もう世界で一番ぐらいのな」

「で？どうしろと？」

「ぜひ魔法を覚えてせいg」やだ」「ってなんでじゃ！」

「正義だとかそういうのめんどくさい」

「なんだと！めんどくさいとはなんだ！」

ここでガンドルフィーニ乱入！

「だって正義なんてその人の価値観次第じゃん

戦争だって正義VS悪じゃない正義VS正義なんだよ」

「それでも他の人の為になろうとは思わないのか！」

「思わない

他の知らない奴なんてどうでもいい
周りの大事な奴だけ守ればいい」

「わかった「学園長！」いいのじゃ
だがせめて魔法だけ覚えてくれんか？」

「いいがこれは借りじゃないあくまで貸しだからな」

「わかった、今日はもう帰って良いぞ」

「おう じゃあな」

俺はそう言ってその場を離れた

その夜学園長はエヴァと将棋をうっていた

「・・・ということなんじゃが」 パチッ

「はははっ！良いじゃないかそのぼーや、私好みの性格だ」 パチッ

「ムム・・・そう来るか・・・」
「そこでおぬしに師匠を頼みたいのじゃが・・・」 パチッ

「良かろう 私も興味が出てきた 引き受けてやる・・・これで積

みだな」

パチッ

本人が知らないところで刻々と計画は進んでいた

ハハハハ 俺に逆らうとは・・・30年遅いわー！（後書き）

どうだったでしょうか？

感想など貰えるとうれしいです

もうネタ切れに・・・きつすぎる(前書き)

初めて第三者視点に挑戦

もうネタ切れに・・・きつすぎる

・・・次の日・・・

「ったくあのジジイは・・・昨日呼び出したばかりじゃねえか」

虎雄は文句を言いながら駅でタカミチの迎えを待っていた

今日の朝、孤児院に電話があり

「今日も来てくれ 駅で迎えとして高畑君が来るはずじゃから」

と、一方的に用件だけを伝えられ反論できずにしぶしぶ駅で迎えを待っていた

しばらくすると・・・

「おい、虎雄くん」

と、タカミチの声

「遅い！待ち合わせ時間10分も過ぎてんじゃない」

「ごめんごめん」

タカミチは苦笑いをしながら誤っている

「じゃあいこうか？虎雄君」

そうついいながら二人はあるきはじめた

・・・学園長室前・・・

コンコン

「失礼します、虎雄君をお連れしました」

「うむ、入ってくれ」

二人は学園長の声を確認し扉をあける

「すまんの虎雄、いきなり呼び出して」

中には学園長とエヴァンジェリンが居た

「いいよ、で？きょうはなに？」

「今日はおぬしの魔法の先生を紹介する」

「今日からお前の教師になるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ

せいぜい死ななでくれよ」

エヴァが一步前に出て自己紹介をする

「宜しく願います

俺は師匠の事なんて呼べばいい？」

「そうだな・・・マスターとでも呼んどけば良からう」

「はいマスター」

「う、うむそれでいい…／＼／」

エヴァは頬を赤く染め照れていた

「で？それだけ？」

「うむ、わしからはこれだけじゃが・・・」

「とりあえず今日はこの私とこれからの修行のメニューを決めるために一回手合わせをしてもらう」

「わかりました」

「ならば行くとするか・・・」

そう言い残しエヴァと虎雄は学園長たちの前から消えた

・・・エヴァンジェリン宅・・・
気がつくとログハウスの中にいた

「む？起きたか、びっくりしたぞいきなり倒れるのだからな」

（そりやそうだ、初めて転移魔法なんてやられたんだから）

そう、虎雄はいきなりの転移にびっくりして気を失ってしまったのだ

「もう用意は出来ているぞ、早くこのボトルの前に立たんか」

「わっ解りました」

そついい虎雄はボトルの前に立つ

「いくぞ」

シュン

・・・別荘内・・・

シュン

エヴァと虎雄は別荘の中に無事着いた

（へー、こんなになってんだ・・・）

虎雄はそう思いながらもびっくりしたような演技をする

「え？ここは・・・どこですか？」

「ここは私の別荘の中だ

ここでの一日は外での一時間になるわけだ」

「へー、すごいんですね！」

「いや、それほどでも・・・／／／」

「そんなことより早く始めるぞ

それと・・・そのお前が隠してるその能力も教えてもらおうか」

「！？」

（ばれてる！？）

虎雄は観念し能力（めだかボックスと神話の物だけ）について話した

「ふむ、興味深いその能力

まあその能力の実用性は戦いで見せてもらおうか」

もうネタ切れに・・・きつすぎる(後書き)

次回！いよいよバトル！

戦闘描写は嫌いだ！

感想・誤字脱字などありましたら是非教えてください

戦闘シーン（前書き）

感想ください・・・ほんとに

戦闘シーン

「では始めるか」

エヴァはおもむろに小さめな人形を取り出す

（怪しまれない程度に…）

虎雄は先ほど能力を見破られてしまい警戒心が高くなっていた

「？なんですか？その人形」

「ケケケ、ゴシユジンヤットナニカキザマセテクレンノカ？」

「ああ、存分に暴れろ」

「人形が喋った・・・、それも魔法ですか？」

「そうだ、紹介しよう、私の従者のチャチャゼロだ」

「ケケケ、ヨロシクナコゾウ」

「まあ従者についてはまた今度教えてやろう
始めるぞ」

その瞬間周りの気温が一気に下がる

「行くぞ？」

エヴァはその場から消えたように見えた《・・・・・・・・》
消えたと思うほど早く動いたのだ

「!？」

虎雄自体はその姿は見えなかった
が

異常の「反射神経」が働き何とか防ぐことが出来た

「ほう？それが異常というものか・・・」

エヴァは喋りながらも攻撃の手を緩めない

「くっ・・・」

「ほうまだ耐えるか・・・」

エヴァは徐々にスピードを上げている
さすがにさばききれなくなったのか虎雄の顔がゆがむ
そこで虎雄は距離を一度あけて落ち着く

「ふゝ、さすがに能力使うか・・・」

虎雄は手を前にかざす

「こい！エクスカリバー！」

その瞬間虎雄の手に剣が現れる

「ふむ、召喚の為のタイムラグはほぼなしか

そろそろ本気で行くか…チャチャゼロ！」

「アイヨ！ゴシュジン」

チャチャゼロが鉈を構え飛び込んでくる

「リク・ラク・ラック・ライラック来たれ氷精、大……」

その後ろでエヴァが呪文を唱える

チャンスだと思いいエヴァに狙いを定めたが……

「オレヲワスレンジャネーヨ！」

チャチャゼロに進路をふさがれてしまう

「…と氷河を

よけるチャチャゼロ！

『氷る大地』」

その瞬間地面から氷柱が出てくる

「うお！あぶね！」

必死によけるがよけきれず足元が凍ってしまふ

「だが甘い！」

虎雄は足だけを局部的に『凍る火柱』で熱し
氷を溶かす

そして足が凍ったことで安心したのか瞬間的に動きが止まったチャゼロの四肢を切り落とす

「チャチャゼロ！」

「スマネエゴシユジン」

エヴァは一瞬チャチャゼロを心配するがすぐに気を引き締め鉄扇を取り出し一振りする

虎雄は一気に間合いを詰めるが

虎雄の体がいきなり止まる
良く見ると周りに細いワイヤーが見える

「ははは！油断したなボーヤ
この私が接近戦であることを考えていないとでも思ったのか？」

虎雄の初戦は完敗で幕を閉じた

・・・エヴァンジェリン宅・・・

あれから異常や過負荷、召喚などについて研究＆鍛錬をしていた
そのおかげで異常と過負荷はON/OFFを切り替えることに成功し
召喚については同時召喚なども可能になった
そのさい

「貴様もバグなのか・・・？」
とかつぶやいていた

鍛錬も終わり余り帰るのが遅れると孤児院に心配をかけるのでこちらに戻ってきた
帰り際には

「今度からは土曜日か日曜日に来たまにしか来れない分別荘でたっぷり鍛えてやる」
と、ありがたいお言葉を頂き孤児院に帰った

小学生って楽しかったな（しみじみ）

あれから3年たった・・・

エヴァには座学から実践まですべてを詰め込まれた

さすが最強の頭脳！一度聞いただけですべてを覚え、忘れないだけでなく

一を聞いて十を知るをそのまま体現してる！

まあ座学は途中からナギ・スプリングフィールドの話になったけど・・・

あれから小学校に入学した

もちろん千雨と同じ学校で同じクラスだ

いじめについては入学当初からあったのですぐに止めようとしたが止まらなかったので千雨と友達になることでいじめから守っているしかも千雨と仲良くしているので僕もいじめられている（返り討ちにしているが・・・

今は下校途中だ

「なあ、トラ・・・」

僕のあだ名（呼んでくれるのは千雨だけ）トラになった

「なに？千雨？」

「いや・・・私のせいですまないな」と、思つてよ・・・」

「いいんだよ！僕は千雨が好きなんだから」

ちなみに僕と千雨は付き合っている

初日に告白したらなんと！成功したのだ！

千雨いわく

「私もその・・・一目惚れしたから・・・／／／」

と、何ともかわいらしい答えが返ってきた

「うっ、そう明言されると恥ずかしいんだが・・・／＼／」

「だってほんとの事だし・・・

それに千雨の言っていることもわかるもん」

「ほんとおかしいよね、この学園

いろんなところに常識外の事があふれているんだから」

「まあいいんじゃない？」

僕は千雨と一緒にいれるから良いけど」

「ま、まあな・・・／＼／」

そっという会話をしながら帰っていく

・・・日曜日・・・

今日はエヴァの所で修行である

「やっと来たか、ばーや今日は卒業試験だ」
卒業？そんなのあんの？

「ああ、もうお前が覚えることは一つしかない」
もしかして・・・

「そのとうり、：闇の魔法：だ」
もうそこまでいったのか…

「では始めるぞ」

そっぴいながらいつのまに手にしていた巻物を広げる

「これはお前ように作った特注品だからな」

巻物からは黒い闇がでてきて僕の周りを包み込む

・・・闇の中・・・（第3者視点）

そこには闇しかなく虎雄はただたたずむしかなかった
すると目の前からまるで自分を黒く塗りつぶしたようなものが出て
きた

『よう！』

「お前は・・・俺か・・・？」

『察しがいいな』

『そうだ、俺はお前で、お前は俺だ』

「お前をたおせばいいのか？」

『いや、今回は戦闘はなしだ』

俺の言うことをただただ聞き、そして時間になるまで耐えればいい
時間は俺が決める』

「そんなんでいいんだな？」

『よゆうだな？じゃあ始めるぞ？』

「おう」

『お前は本当にこの世界で生きていると言えるのか？』

「なに？」

『お前がいきているのは事実だ、だが！
この世界で生きているのか？というのが問題だ』

「何をいつている？俺はここで、この世界で！生きているじゃないか」

『お前はこの世界の人をキャラクターとして見ているじゃないか！？
お前は本物で皆は偽物・・・こういう風にみているんじゃないか？』

「！？」

「そしてお前の彼女、千雨、彼女もキャラとしか見ていない」

「・・・」

『だんまりか・・・、

お前は確かに他とは違う！つまり！お前はこの世界の人間ではない
！』

「・・・そうだな」

『だろ！』

「でもな・・・」

俺はもうこの世界の住人なんだよ！
それはかわらない！誰が何と言おうと！」

『・・・よかった』

「？」

『お前を殺さなくていいからだよ
そのまま受け入れずに攻撃して来たらダメージはおまえに戻って
いくからな』

「話が見えないんだが・・・」

『ははは！おれもわからんよ
だがなお前は合格したそれだけだ』

そっぴいながらきえていった
闇もはれていく・・・

・・・別荘内・・・

「合格したようだな」

「はい」

「では闇の魔法を教える！」

そついいエヴァは詳しく教え始めた

~~~~~  
~~~~~

「・・・よじやってみる」

「はい」

「プラクテ・ビギナル来れ、深淵の闇、燃え盛る大剣！！闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焰！！我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者『奈落の業火』」

固定。掌握。魔力充填『術式兵装』」

「・・・よし安定しているな」

そうして虎雄はエヴァの修行をおさめた

小学生って楽しかったな（しみじみ）（後書き）

感想とか暮れると嬉しいです
あと始動キーも…

主人公設定（前書き）

今更だけど・・・

主人公設定

かげやま とらお

名前 上下山 虎雄

年齢 8歳

性別 男

身長 130cm

体重 28.6kg

髪の毛 ロン毛で後ろで縛っている 黒色

眼 黒色

好きなもの 修行、千雨、朝倉、自由、漫画、アニメ

嫌いなもの 正義を掲げてるバカな魔法使い

性格 正義バカが嫌いな小学生

千雨が好きで付き合っている

周りの人がよければいいという考え方

能力 ? 魔力はこのかの30倍・気はラカンの30倍

? ありとあらゆる才能

(絵の才能、作文の才能などなんでもあり)

？神話上の物すべての召喚

（生物あり、同時召喚可能、特訓により生物を闇の魔法で取り込むことに成功

した）
その後指輪などを媒介にすることで負担をなく

？最強の頭脳、瞬間記憶能力、完全記憶能力

（同系統なので以降最強の頭脳）

？身体能力最強

（あらゆる漫画のキャラよりも強い）

？めだかボックスの異常・過負荷・安心院の能力

（すべてON/OFF可能、すべてに完成適用）

？限界突破

（鍛えれば鍛えるほど強くなる、魔法も適用）

始動キー ヴォル・ヴァル・ザーク・ヴァルザーク

修行終わったらどうしよう・・・(前書き)

感想くれないとすねるぞ？

修行終わったらどうしよう・・・

六年生最後の日もいつもどおり千雨と一緒に帰っていた

「・・・でさ！作画がよかったんだよ」

最近千雨がオタクになってきた

「そうなんだ」

さすがにそこまで詳しくは無いので適当に流しとく

エヴァの修行をおさめ日曜日などがあいた僕はその日を「デート」などに当てている

「そういえば明日のデートどうする？」

もう中学生になるとあんまりあえなく成るけど・・・」

「そうだな」

でも休みの日とか会いに着てくれんだろ！」

満面の笑みでそう言われてしまい顔が赤くなってしまうのがわかる

「う・うん・・・／＼／」

「じゃあ今日はメガネ屋でも付き合ってもらおうかな？」

「え？眼わるかったけ？」

「いや、中学入ったらイメチェンしようかと」

「へへ、そうなんだ」

じゃあ最高に可愛いやつ選んであげるよ」

「いや、私は普通のでいいんだが・・・」

次の日

原作と同じ様なメガネを買った
特に書くこともなかったただ甘すぎる空間を作っていた

そして翌年3月

その日虎雄は学園長に久々の呼び出しをくらっていた

おそらく女子中への転校だと思う

入学したらまず新聞部に入り朝倉に接触してみた

ファーストコンタクトはまあまあの感触

あれから天使様パワーか？朝倉とコンビを組みながら取材をしていた

・・・学園長室・・・

「で？なんだ？」

「うむ、今日はチョットおねがいなの・・・」

「さっさと言えよ

貴重な時間割いてんだからよ」

「うむ、おねがいというのは・・・女子中学校へ転校なんだが」

「なんでだよ、理由から放せ」

「実は、サウザンド・マスターの息子が教師をしておりのもその手伝いをしてもらおうかと」

「ふむ・・・別にいいぞ

後前から言われていた警備の件も引き受けてやる給料は口座に振り込んどけ」

「うむ、ありがたいの」

「じゃあそれだけだな？」

「じゃあな」

4月

その日も虎雄は学園長室にいた
目の前には小さな少年が居た

「ネギ・スプリングフィールドです
よろしく願います！」

そう今年から担任になるネギ少年だ
「宜しくね、ネギ少年」

「はい！じゃあ行きましょう」

そついい学園長室から出ていく

やっと原作・・・（前書き）

感想くれるとうれしいな^^

やつと原作・・・

・・・廊下・・・

「へー、共学化のテストケースですか」

虎雄はネギに転校の建前を話していた

ちなみに家に関しては近くのアパートに住んでいる

「はい、おそらく僕らの卒業した後でしょうが・・・」

「そうですか・・・」

そんなことを話している内に2 - Aの前に着いた

「それじゃあ僕がよんだら入ってきてください」

「はい、わかりました」

そっういネギは教室に入っていく

・・・教室・・・

「おはようございます、皆さん」

「」「」「おはよー、ネギくん」「」「」

「皆さんには今日から新しい仲間が増えまゝす」

「えゝ、朝倉しつてたゝ？」

「もちろん！本人から聞いたもん」

「え！もうあつてんの！？」

「だって同じ新聞部の子だもん」

「それじゃあ入ってきてくださーい」

ガララ

あれだけ騒いでた教室に沈黙が流れる

「えゝ、では

自己紹介をお願いします」

「はい、今日からこのクラスでお世話になります上下山 虎雄です」

よろしく願いします」

「「「「「か、「「「「」

「「「「「かつこいいいいいいいいいい」

沈黙が破れ大きな声が聞こえる

「なんで女子中に転校してんの？」「彼女はあるの？」「いないなら付き合って」

雨のように質問が飛んでくる

「はいはい、質問は私にまかせて」

朝倉が皆に聞こえるほどの大きな声で言う

「じゃあ、まず転校の理由から」

「はい、共学化のテストケースだとジジイから言われています」

「ジジイ？」

「ああ、学園長ですよ」

「あゝ、なるほど」

「じゃあ次はこのクラスで気になる人は？」

「いませんよ、好きな人ならいますが」

「え！だれだれ」

「千雨と朝倉ですかね？」

「」「」「ヒューヒュー」「」「」

「ちよっ！おまえなにいつてんの！」

千雨があわてて立ち上がる

「なにつて、好きな人をすきって言うちゃだめなの？」

「いや、ダメじゃないけど・・・はずかしいし／＼／」

「もしかして二人はつきあってんの？」

虎雄は千雨の肩を抱き寄せ

「はい、小学校から付き合っています」

「や、やめろよ！！／＼／」

「じゃああさくらがすきっていつのは？」

「ははは、友達としてですよ」

「なーんだ、ちよつと期待してたのに」

「みなさんそろそろ授業始めますよ」

上下山さんはエヴァンジェリンさんの隣に座ってください」

「はい、わかりました」

そうしてそのあとは授業を受けたりして昼休みになった

最近更新が辛い・・・(辛いじゃないぞ?つらいだぞ?)(前書き)

PV200000突破!

これはおおいのか?

最近更新が辛い・・・(辛いじゃないぞ？つらいだぞ？)

・・・昼休み・・・

「ちーさめ！」

虎雄は昼休みになった途端千雨を後ろから抱き締める

「バ、バカっ／＼いきなり抱きつくな！／＼／」

「いいじゃん！別に恥ずかしくないし」

「私が恥ずかしいんだよ！！／／／」

「くくくく(バカップル)くくく」

「ぼー」

「どうしたでござる？朝倉殿、ボーっとして」

「え、いんや、なんでもないよ」

「そつでござるか」

「千雨いつしよにご飯食べよ」

「わかったからだきつくな！／＼／」

「しょうがないな」

虎雄はしぶしぶ千雨からはなれる

「じゃあ購買いつてくるからちょっと待っててくれ」

「ふふふ、そんなの必要ないよ？」

「？なんでだ？」

「じゃっじゃじゃーん！手作り弁当」（ドラえもん風に）

「おっ！気がきくじゃん！じゃあ食べに行こうぜ！」

「うん！屋上あたりでいい？」

「おう！」

そついいながら二人は教室を後にした

「……何あのバカップル」「……」

2・Aのほとんどが寸分狂わずもうそこにはいない二人に言い放った

「でもあんなに明るい長谷川さんはじめてみたな」

大河内は誰にも聞こえないほどの声でぼそりと呟いた

・
・
・
屋上
・
・
・

「んゝ、いい天気だねゝ」

「そうだな、早く食べようぜ」

「いいよ、じゃあ御開帳ゝ」

虎雄の手の中にあつた重箱が開く

すると、中からは豪華絢爛なおかずが出てくる

「おおゝ、うまそうじゃん！

あれ？でもはしが一膳しかないじゃん」

「あつっぽんとだ
とつてくるね？」

そついいながら立ち上がろうとする虎雄の袖を千雨がつかむ

「どうしたの？」

「・・・してくれ」

「？」

「その・・・アーンしてくれ／＼／」

「！いい、いいの？」

「何度もいわせるな！」

千雨は眼を閉じ口をあける

「じゃ、じゃあいくよ？アーン」

虎雄は箸で取った唐揚げを千雨の口に入れる

「ん、もぐもぐ」

おいしいな、ありがと／＼／

そのあとアーンをしたりされたりでいちゃいちゃしていたらあっという間に昼休みは終わってしまった

最近更新が辛い・・・(辛いじゃないぞ?つらいだぞ?)(後書き)

今回はいちゃいちゃかいでしたね

感想ください

夜のお・し・こ・と？（警備ですよ？変な想像したやつ手あげろ）（前書き）

感想ください

評価も付けてくれると嬉しいです

夜のお・し・こ・と？（警備ですよ？変な想像したやつ手あげろ）

・・・放課後・・・

虎雄はひとりさびしく帰っていた

千雨は用事があるから先帰っててくれとのことなのでひとりなのだ
その時背後から小さな人影が！

「おい、ぼーや」

「何ですか？師匠？藪からスティックに」

「そんな古いネタをつかうな！」

「はいはい、でなんですか？」

「ふん！馬鹿どもがお前の歓迎会をするんだと」

「へー、ってそれ言っちゃだめなんじゃないですか？」

「知ったことか」

「はー、まあ良いです」

「それじゃあついてこい」

二人は無言で歩きだす

「・・・・・・・・・・」

「……………」

「そういえばちゃんと修行してるか？まさかなまってないだろうな？」

「大丈夫ですよむしろ上がってますよ」

そついい道路からこぶし大の石を拾い指二本で粉々にしていた

「……お前ほんとにバグだな」

「失礼ですね」

また無言となりいつの間にか教室に着いていた

「お前から入れ」

「はい」

ガララ

「……………ようこそ2・Aへ」

「じゃあ今夜は無礼講だー」

「……………いえ……………」

朝倉が仕切ってもう皆飲んで食って騒ぎまくっている

「楽しんでるか？」

千雨がちかずいて話しかけてくる

「うん、それにしてもこの料理美味しいね」

「ああ、それはうちのクラスのやつが作ってんだよ」

「へー、なんかこ非日常にもなれてきちゃったな」

「私も最近どうでもいいやと思って来たよ」

二人はすっかり話し込んでしまっていたのかお開きになっていた

「じゃーね」

「ああ、また明日な」

そのあと千雨が部屋に帰ってしばらくして寝ようと思っていたところ

ピンポン

不意に部屋のチャイムが鳴った

（なんだよこんな時間に・・・）

「はい、どなたで…って朝倉か、なんだよ」

「いやちよつと宣戦布告に・・・ね」

「宣戦布告？」

「うん、あのね私虎雄が好きなんだよね・・・」

「はぁ！なななにい！？」

「だから宣戦布告、私は正々堂々虎雄を奪うから！」

朝倉はそれだけ言い足早に去って行った

千雨はただ呆然としていた

・・・世界樹前・・・

夜中の12時

学園中の魔法先生・生徒はそこに集まっていた

「遅れました」

そこにその場の空気に合わないほど穏やかな声が響いた

「へー、こんなにいたんだ」

「遅かったの虎雄」

「うるせえぞジジイ」

「ふむ、それでは紹介しよう

今日から警備に加わって貰う上下山 虎雄じゃ」

「宜しく願いしまーす」

「それでは誰と闘ってもらおうかの・・・
言っておくが虎雄は闇の福音の弟子じゃ、戦いたい者は覚悟するよ
うに」

しーん

誰も手をあげない

それほどまでにエヴァのネームバリューはすごいのだ

「ふむ、こまったのお」

「私がやります！学園長！」

そこでガンドルフィーニが手をあげる

「うむ、良かろう

他にはおらんかの？」

ガンドルフィーニを合図に続々と手が挙がる
ほとんどの魔法先生・生徒がてをあげた

「ふお！？こんなにかの？
だいじょうぶかの？虎雄」

「問題ない」

それでは始め！

・ ・ ・ 戦闘不参加組 ・ ・ ・

「刹那、あの少年にどのような印象を抱きましたか？」

「あ、刀子さん。そうですね ・ ・ ・ バカップル？」

「バカップル・・・ですか
少なくともそこまでの強さは無いのですね？」

「はい・・・おそらく」

二人は虎雄は強くないと踏んでいた
だが二人がみたのは圧倒的な戦力で相手を押し切る・・・虎雄だった

・・・戦闘組・・・

「それじゃあ始めますか」

虎雄はいきなりポケットに手をつ込んだ

「ふざけやがって！」

ひとりの魔法先生が無詠唱で魔法の矢を打ち出した
それは虎雄にあたったが土煙が出てきて安否は確認できない
そこでとどめを刺そうと一斉に魔法の矢を打ち出す

「光の精霊11柱 集い来たりて「敵を射て。」

『魔法の射手・連弾・光の11矢』×40

440の矢が虎雄に向かう

ほとんどの者が安心して警戒心が緩んでいた

皆少なからず悪の魔法使いの弟子である虎雄を敵視してたので威力は半端ない

だが

「『『『『グワ！』『』『』』」

一斉に最前線にいた魔法使いが倒れた

『不慮の事故』

蝶ヶ崎 蛾ヶ丸の過負荷でダメージを他人に押し付けることが出来る
つまり自分にキタダメージを相手に押し付けていたのだ

そのあとは『光化静翔』でどんどん雑魚を倒していき残りは
ガンドルフィーニと？音・D・グットマン飲みになっていた

「まだまだ！いくぞ！」

ガンドルフィーニが突進してくる

いい加減めんどくさくなったのか虎雄は

『致死武器』

でガンドルフィーニの古傷を死なない程度に開いた

「ぐわああ」

最後の高音は『光化静翔』でちかずき『凍る火柱』で服を燃やしつ
くしてフィニッシュになった

「これで終わりか？」

「う、うむ、それでは今日は解散じゃ
負傷者は保健室へ運んどいてくれ」

「じゃーなー」

夜のお・し・こ・と？（警備ですよ？変な想像したやつ手あげろ）（後書き）

戦闘描写は苦手だし

魔法使っていないし・・・

鬱だ、死のう

皆（裏の人）が変な眼で見てる（前書き）

感想ください

皆（裏の人）が変な眼で見てる」

次の日

学校へ向かおうとすると千雨を見かけた虎雄
声をかけようとしたところ・・・

「・・・」

「・・・」

朝倉と千雨が何ともピリピリとした空気をかもし出していた

「お、おはよ・・・」

「おはよう」

「ふたりはなかいいの？」

「まあ、ね」

気のせいか二人の間に火花が散っている

「・・・」

沈黙が三人の中にながれる

そのまま教室へ・・・

・・・教室・・・

「おはようございます・・・」

「おはよう」

「おっはよーー」

身体測定

外に出て終わるのを待っていたら和泉が佐々木が倒れたと言って来たので皆が廊下に取り出してきた

振り返ろうとしたら千雨に眠つぶしをされてとても痛かった
だが置いていかれるのもあれなので頑張って保健室まで言った

するとやはりエヴァの魔力がした
急いで教室へ戻った

「ししようですね？これをしたのは」

「そうだがなんだ？私でもたおすか？ならばやってm・・・いや・・・
・そういえばお前一回私を殺しかけたよな・・・」

「とめませんよ、どうせジジイの陰謀でしょうから
でもひとつお願いがあります」

「ん？なんだ、言ってみろ」

「僕も一枚かませて下さい」

「ふふふ、良からう」

今夜行動を起こすから桜どつりで待っている」

「わかりました」

そして放課後

桜どつりでエヴァと共に街灯の上に虎雄はたたずんでいた
そこに宮崎が現れた

「いつてらつしゃい、」

エヴァはそこから飛び降り宮崎の血を吸おうとしている

そこにネギ先生が来てエヴァに魔法の射手をうったので虎雄はえヴ
あの目の前に行き『不慮の事故』でダメージを道路に押し付けた

「か、上下山さん!？」

なんでそこに・・・

それにエヴァンジェリンさんはなんで魔法をそんなことにつかうん
ですかー」

「この世には良い魔法使いと悪い魔法使いが居るんだよ、ネギ先生」

「そして僕はその悪い魔法使いの弟子なんですから」

そこに明日菜たちが来たのでエヴァたちは空高くへ逃げる
しばらくするとネギが追いついてきた

「お前は手を出すな」

「はいわかりました」

そのあとはほぼ空気になってしまった

更新きつつ！（前書き）

感想ください

それと今日・・・

更新きつつ！

翌日

虎雄は朝から奇妙なものを千雨と共にみていた

「・・・おい」

「大丈夫、言いたいことはわかる」

二人の目線の先には・・・

「お、おろしてくださいっ！エヴァンジェリンさんたちが居たらどうするんですか！？」

「学校で暴力振るって来たら退学にすればいいじゃない」

「そ、そんな簡単な話じゃ・・・」

神楽坂に担がれている少年だった

「あんなんでいいのか？教師だろ？」

「それに朝会とかもあるんじゃないの？」

「だよな・・・」

「まあ見なかったことに・・・」

「だな、さっさと行こうぜ」

二人は足早にその場から離れた

・・・教室・・・

「パートナーを選ぶとして、10歳の年下の男の子っていやですよ

ね？」

少年はそう言ってしまった

「・・・」

虎雄は呆れてものも言えなくなってしまった

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴って休み時間

「あの教師何言ってるんだろうな？」

千雨も呆れながらそう言っていた

そのあとは原作どおり

昼休みあたりに結界に反応があったが力もだろっから放置しておいた

翌日

これといったこともなかったので放課後

千雨と別れた後ひとりでぶらぶらしていると後ろに少年たちが・・・

（原作と違うね？）

虎雄はこれといった戦闘もしなかったので狙われた

（しょうがないな、その路地に入ればいいか・・・）

虎雄は路地に入り小さな公園に出た

「そろそろいいですよ？ネギ先生」

「え！ばれていたんですか・・・」

「何の用ですか？」

「上下山さん・・・僕を狙うのはやめてもらえませんか？」

「残念、それはできないよ」

「それじゃあ・・・」

少年は杖を構える

神楽坂は呆然としている

「しょうがないね」

虎雄はポケットに手を入れている

「ラス・テル・マス・キル・マギステル」

光の精霊11柱 集い来たりて「敵を射て。」
『魔法の射手・連弾・光の11矢』!」

光の束が虎雄に襲いかかる
虎雄はあえて動かない

『不慮の事故』も発動しない

その場にもすごい衝突音が鳴り響いた

虎雄はその場に倒れていた
身体はぼろぼろ、体中から血が出ている

「あ、ああ、うわあああああああ」

少年は何をしてしまったかを理解し魔力の制御がきかなくなる

「アニキ!おちついてくださいえ!」

「ぼくは、ぼくは!ぼくは!」

「そうだお前は人を傷つけた」

そこには無傷の虎雄が居た

「大嘘憑き」で傷をなかったことにしたのだ
だが少年はそのことにきづいていない

「僕は人を傷つけた、いやだいやだいやだ!マギステルマギになれないなんて!」

それまで呆然としていた神楽坂が冷静になる

「落ち着きなさいバカネギ！よく見なさい！無傷よ！」

「え？な、なんで・・・？」

「それが僕のできる能力ですから
じゃあさようならネギ先生！宿題もありますからね」

・・・エヴァ宅・・・

「・・・つと、こんなことがあったんですよ」

エヴァは呆然としている

『大嘘憑き』は「なかったことにする能力」としか言っていなかった
のでどこまでできるかはわからなかったのだ

「・・・お前はほんとにバグだな、その気になれば私なんか瞬殺じやないか」

「ははは、そんなことしませんよ」

「それにしてもひとりずつ撃破か・・・」

良い策だがお前をねらうとはな・・・馬鹿な奴らだ」

「僕は明日の二人の反応が楽しみですよ」

更新きつつ！（後書き）

今日学校で振られた・・・

友達に頼んでネギまを貸してもらったことに！
これで中身が増えるといいな

原作ゲット！（前書き）

友達から原作貸してもらいました！

原作ゲット！

「おはようございますっ

エヴァンジェリンさんいますか!？」

次の月曜日

朝から少年は元気だった

虎雄は虎雄で違う意味で元気だったが…

「（土日は千雨とデートできたからもう野菜なんてどうでもいいや）

」

虎雄は土日連続でデートなんてしていた…リア充氏ね！

「・・・さん？・下山さん？上下山さん！」

「うお！なんですか？先生？」

「いえ、これだけ渡そうと思ひまして…」

少年はその手に果たし状と書かれていた

「わかりました、で？用事はそれだけですか？」

「あ、はい

あとえヴァンジェリンさんは・・・？」

「なんや力ぜでお休みするてれんらくが・・・」

少年は少し考え

「ハアハア、間に合った・・・？」

神楽坂が来たと同時に

「うーん、よし」

少年は走り出した

HRは大丈夫なのか？少年！

「大丈夫なのか？あの教師、授業もほっぽり出して」

「大丈夫じゃないでしょ

あとで新田先生に報告だね」

「あんまりいじめるなよ？後なんだそれ？果たし状？」

「後で見とくよ」

その後少年が居なくなっただことで余計にうるさくなつた2・Aは注意しに来た新田先生にこつてり絞られ

帰り際に

「ネギ先生も注意しておかなくてはいけないな」

と言っていたので委員長が少年の事を心配していた

そして次の日の夜

本当は夜の警備のシフトなのだがジジイに頼んではずしてもらいエヴァのサポートに回っている

・・・大浴場・・・

「師匠？その格好どうにかありませんか？」

「む、なんだふまんか？」

こういうのが好きなんじゃないのか？男というのは「

目の前にはメイド服の和泉、佐々木、明石、大河内がいる

「いやすきは好きですけど、皆に合わせてこのかつこうですか？僕？」

虎雄は燕尾服を着ていた

「にあっているからいいだろ？」

「そろそろネギ先生がいらっしやいます」

「そうか、でははじめようか」

原作ゲット！（後書き）

ダメだ

パソコンが少ししか使えない

野菜はフルぼっこだぜ (前書き)

れんぞくとつこつー！

野菜はフルぼっこだぜ

「エヴァンジェリンさん!!」

薄暗い大浴場に少年の声が響く

「どこですか？まき絵さんを放してください…！」

「ふふ・・・」

どこからか声が聞こえ明りが付く

「ここだよ坊や」

そこにはエヴァンジェリンとメイド服を着た明石、和泉、絡繰、大河内、佐々木が居た

後ろには燕尾服を着た虎雄もいた

「パートナーはどうした？」

大人バージョン（幻術だが）のエヴァが話しかける
何とも色気のある格好で・・・鼻血出てきてしまった

「一人で来るとは…フ、見上げた勇氣だな」

「あ、あなたは…！」

「どなたですか!？」

スTeen

思わずコケてしまったエヴァと虎雄はすぐに体制を立て直し

「私だ私ーーーーーっ」

「っかこのメンバー見て気付かない？」

エヴァは幻術を解きながら、虎雄は呆れ気味に言う

「う、すいません」

「まあいい、満月の前で悪いが・・・今夜ここで決着をつけて坊やの血を存分にすわしてもらっよ」

エヴァは仕切り直し改めて目的を高らかに宣言する

「（アキラさん、ゆうなさん、亜子さんまで・・・）……わかりました

でもそうはいきませんよ

今日は僕が勝って悪いことをするのはやめてもらいます!」

「それはどうかな?・・・いけ」

パチンっ

エヴァが指パチンをした途端に周りのメイドが動き出す

「ひ、ひきょーですよっ」

「卑怯・・・？」

「言っただろう？」

私は悪い魔法使いだって」

少年の目の前にはいつの間にか佐々木たちがいた

「フフ・・・一人で来たことをとつくりと後悔させてやろう」

「やれ

我がしもべたちよ」

エヴァの命令と共に佐々木たちは一斉に少年に襲いかかった
襲いかかったと言っても脱がしているだけだが…

少年は必死に抵抗するが効果がないのでとつさに魔法薬を出し

風花・武装解除！！

そしてすきを突いて逃げ出した少年は

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

大気よ、水よ、白霧となれ、彼の者等に一時の安息を

『眠りの霧』」

佐々木たちのいるところから白い霧が飛び出した
だが佐々木と明石はよけてしまった

だが直撃した和泉と大河内は眼を閉じ前のめりに倒れそうになる
「わっと」

ぎりぎり少年が受け止め静かに横に寝かせる

「フ…やるじゃないか

では本番と行こうかボーヤ

茶々丸！虎雄！」

「「ハイ」」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

「失礼します、ネギ先生」

「行きますよ？」

後ろでエヴァが呪文を唱え茶々丸と虎雄がネギへ突進する
そこへ佐々木と明石も加わりどんどん少年を追い詰めていく

「氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け」

後ろではエヴァが詠唱をどんどん進めていく

「（いけない、一斉に襲われたらひとたまりもない！）」

少年はあつという間に窓際まで追い詰められてしまった
エヴァは詠唱を終えて少年に狙いを定め

「喰らえ！」

『魔法の射手・連弾・氷の17矢』」

それをよけようとした少年は魔法の射手はよけたものの勢い余って窓を突き破り下に落ちていく

だが魔法の射手は勢いを殺すことなくネギ少年を追い続けている
衝撃で少し意識が飛んでいたネギだが地面すれすれで気が付きとっさに杖にまたがり魔法銃で応戦した

「ほう・・・」

魔法銃とは珍しいな」

「全弾撃破確認

ネギ先生は骨董魔法具のコレクターだそうです」

「魔法の道具のフル装備が
安くはなかるうに」

そのころ少年は

「何とかあの場所までおびき出さないと・・・」

何か仕掛けていたみたいだ

だが！目の前には佐々木と明石が！

野菜はフルぼっこだぜ
(後書き)

次回！

ネギ君あそぼー？

アハハハ

エ ロ オ コ ジ ヨ
！！

これで決着だ

少年策を考える

「まき絵さん！ゆーなさん！」

少年の前にはメイド服をきてリボンとバスケットボールを持った佐々木と明石がたたずんでいた
佐々木はリボンを巧みに使い少年がまたがっている杖に器用にリボンの先端を結び付けた

「！？」

少年は何をしているのか分からず驚きそのすきに佐々木は遠心力を利用し少年の杖の先端に降り立った

「なっ……」

まき絵さんあぶっ、あぶっ……」

少年は必死に先端からおろそうとするが佐々木は聞こえてないかのように微笑み

「ウフフ？」

ネギ君あそぼー？」

不安定な杖の先端から繰り出したとは思えないほどの蹴りを繰り出した

「わー！」

チッ

少年はその蹴りを必死によけるが髪にかすってしまった

「やつ、たあ？」

「わっ、うひゃっ」

佐々木は攻撃の手を緩めない

少年も必死によけるがよけきれず装備していた魔法の道具が落ちていく

その下では明石がものすごいスピードでドリブルしている

「ひとりじめはするいよー？」

明石は少年と佐々木にボールを投げた

「あぶぶ」

「キャ」

投げられたボールは見事に二人にあたり少年はバランスを崩してしまったが何とか体制を立て直した

「（ま、まずいこのままじゃ・・・）」

少年はどうかこの状況をひっくり返そうとしている
その時少年の眼には校章が書かれた旗が映った

「（これだ！）」

少年は杖にしがみつき旗へ突進した

「わぶ！」

佐々木は先ほどのボールが聞いていたのか旗にあたった途端に杖から落ち下にいた明石と頭からぶつかり気絶してしまった

「アハハ

本当によくやるじゃないかあのぼーや」

「確かにおもしろいですね」

「マスター、残り時間にご注意を」

「停電復旧まであと72分21秒です」

「わかっている

そろそろ決着をつけてやろう」

「氷爆！！」

少年はエヴァの攻撃を何とか耐えていた

「ハハハ

どうした逃げるだけか

もつとも、呪文も唱える暇もないだろうがな」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァは空を飛び呪文を唱え始めた

近くには橋も見え少年の目的地はそこのようだ

「来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を

『氷る大地』」

「あぐッ」

橋から氷柱が次々と出てくる

着地しようとしていた少年はよけようとしバランスを崩してしまい
橋の上に落ちてしまった

「へ〜なるほど、ここは学園都市の端

ここから師匠は出れない、負けそうになったら学園がいに逃げれば
いい

以外にせこいね先生」

「（よよし

そのまままっすぐ）」

「そして！それも罠」

「なっ・・・」

「どういうことだ？説明しろ」

「今わかりますよ」

虎雄はそのまままっすぐ歩いてゆき

パアア

虎雄を中心に魔法陣が広がる

そして光の縄のようなものが虎雄を捕らえる

「なるほど、捕縛結界か」

なかなか良い作戦だったぞぼーや

虎雄！助けはいるか？」

「大丈夫ですよ」

こんなのすぐにとけます」

虎雄は異常の『解析』で魔法陣を解析し穴を見つけ出しそこからどんどん崩していくと縄は輝きを失い石となり崩れ落ちた

「ね？」

「ふふ、見事だよ」

「さて、これで決着だ」

そっぴいながらエヴァと茶々丸と虎雄は少年にちかづいていく

「うっ、」

ネギは何も出来ずに呆然としていた

「さて血を吸わせてもらおうか」

そついい口を開けネギの首をかもうとかがむえヴぁ

「あの、マスター

ネギ先生はまだ十歳ですので・・・あまりひどいことは・・・」

「心配するな

あとこの杖はそこらにすてておけ」

そついい腰を抜かしたネギから杖を奪い取り茶々丸に渡す

「そんな！それだけはやめてください！」

少年は必死に頼むがエヴァは何にも答ええない

「わかりました」

茶々丸も命令道理に杖を橋の上から捨てたが、虎雄がいつの間にか杖を奪っていた

「勿体ない事しないでください

要らないんなら僕が貰っても良いですか？」

エヴァは無表情で

「フン、好きにしろ」

とだけ言いまた少年の血を吸おうとしていた
だが、

「コラー、待ちなさいー！ー！」

そこに来たのは！？

少年策を考える（後書き）

次回！

そこか

で は

僕、あの人にかたなきや

ね

さ

ん

いけない！マスター！

戦闘は…梨！（前書き）

感想ください！

戦闘は…梨！

「フン、来たか

ばーやのパートナー、神楽坂明日菜」

そこに現れたのは少年を心配してきた神楽坂とかもであった

「茶々丸！虎雄！」

「「ハイ」」

だがエヴァはそれがわかっていたかのように余裕な表情をしていた
そして茶々丸は神楽坂に向かって走り出し虎雄はその場にたたずみ
『凍る火柱』を発動し右手から炎を、左手から氷を出している

「カモ！」

「合点あねさん」

神楽坂が呼びかけるとカモはどこからかライターとマグネシウムを
取り出した

そしてカモはマグネシウムに火をつけ

「オコジョフラッシュュ！！」

マグネシウムは激しく燃え強烈な光を出していた

「！」

「ごめんね、茶々丸さん」

その光に茶々丸はひるんでしまいそのすきに神楽坂はその脇をすり抜けていった

そしてエヴァに向かいものすごいスピードで駆け抜ける

「フン、たかが人間が私に触れることすらできんぞ」

エヴァは余裕を持ち魔法障壁を張ったが虎雄はそれに加え炎と氷の二重の壁を作っていた

そして神楽坂はエヴァに対してとび蹴りをかました
本来ならば障壁によって止められるはずが・・・

「!？」

神楽坂の蹴りはそのままエヴァの顔面へすい込まれるように綺麗にはいった

だが虎雄の障壁によって幾分かは衝撃は吸収されたようだ
エヴァはそのままぶっ飛び鼻からは血が出ていた

「大丈夫ですか？師匠」

「ああ

ところであの二人はどこだ？」

「わかりません、いつの間にかいなくなっていました
ところでそろそろ帰っていいですか？」

「む、なんでだ？」

「いや、千雨に今日の夜来ないか？つて誘われまして・・・」

「全く・・・、もういい、帰れ」

「はい、失礼しました」

虎雄はそいい空を飛び女子寮の方へ飛んでゆく
その途中、異様に魔力がたまっている場所を見つけみるとそこ
から見えるほど濃厚な魔力があつた

「これは・・・」

虎雄は不審に思い眼に魔力を集め擬似的な魔眼にすると
太いパイプのようなものがありそこに魔力がながれていた

「この方角は・・・京都か、ここまで強大な魔力は・スクナかな？」

そうその魔力はスクナの魔力であつた

関西呪術協会で封じられているスクナだがいくら関西呪術協会でも
すべての魔力を封じめることは難しく日本中にパイプを作り、負担を
軽くしているのだ

「さてよ、このパイプは亀裂が入っているがこのままだとやばくね
？」

虎雄の予想は的中しそこらにいた鬼たちは魔力を求めそこに集まる
うとしていた

「これどうにかしないと・・・そうだ！このパイプを俺にすればいい

いんだ

そうすればパイプは治りそして俺もパワーアップ!」

そっつい虎雄は自分の魔力でパイプを作り今あるパイプから自分のパイプに魔力を移し替えた

そうするとどこからか声が聞こえた

『だれだ?このパイプに割りこめるほどの強者は?』

「うわっ!このこえは・・・スクナか?」

『ほう、ちゃんと自我ももっているか。そう、私はスクナと呼ばれる大鬼だ』

「へー、ところでこのパイプわりこんだらだめだった?」

『いや、問題ないが・・・そうだな、ならば私に外の話をしてもらえるか?』

「そのぐらい大丈夫だぞ!じゃあよろしく」

『うむ、それでは頼むぞ』

そっつい虎雄はまた女子寮に歩き始めた

その後の千雨と虎雄は・・・何かあったようだ

戦闘は…梨！（後書き）

次回！

京都に行ってみるといい

ハ — —
イ — —
？

外伝 神鳴流を覚える

ある日、虎雄は図書館島にいた

その理由としてはある夜の事

警備でたまに一緒になる桜咲の神鳴流を見ていて

「（いいな、覚えてみよう）」

と思った虎雄は桜咲に頼んでみたがやんわり断られてしまいあきらめかけた時に

「そうだ！確か図書館島に『神鳴流奥義百選』だっけ？そんな本があつたはず！」

ということとで現在図書館島にいる

ちなみに今は地下三階にいる

「どこに有るのかな？つと、はっけ〜ん！

これだこれ！これで全部覚えれば！」

虎雄は早速読み始めた

斬岩剣

奥義。剣に気を受けて一振りで岩をも真つ二つに斬る技。

斬岩剣 式の太刀 奥義。前面の人を傷つけず背後の物体を斬る技。

斬魔剣 奥義。怨霊を退散させる技。

斬魔剣 式の太刀 奥義。前面の人を傷つけず背後の魔を断つ技。もともとは悪霊に取り憑かれた狐憑きや悪魔憑きの悪霊のみを切り伏せる技として生まれた。

黒刀斬岩剣 妖刀を使った斬岩剣。

斬魔剣 式の太刀 百花繚乱 複数の魔を断つ技。

雷鳴剣 奥義。剣に電気エネルギーを帯電させて斬る技。

極大 雷鳴剣 奥義。剣に電気エネルギーを帯電させて斬る技。

雷鳴剣 式の太刀 奥義。取り憑かれた人を傷つけず雷で魔を断つ技。

雷光剣 剣に電気エネルギーを帯電させて爆発させ、

広範囲を破壊する技。

真・雷光剣 決戦奥義。剣に電気エネルギーを帯電させて爆発させ、

広範囲を破壊する技。

百烈桜華斬 奥義。円を描くように剣を振り、複数の敵を一度に斬る技。

竜破斬 型は不明。爬虫類などに良く効くらしい。

五月雨斬り 秘剣。落下してくる物体を瞬時に斬り刻む技。

一瞬千激・式刀黒刀五月雨斬り 秘剣。妖刀を二刀使って斬り刻む技。

飛燕抜刀霞斬り 秘剣。二刀で複数の物体を瞬時に斬る技。

閃 斬空閃 秘剣。曲線状に気を飛ばして攻撃する技。

斬空閃・改 秘剣。型は不明。「斬空閃」の強力バージョン。

斬空閃 式の太刀 前面の人を傷つけず背後の魔を断つ技。

弱斬空閃 秘剣。物体を遠くに飛ばすために使用する技。

斬鉄閃 螺旋状に気を飛ばして攻撃する技。

二刀連撃斬鉄閃 二刀を使って「斬鉄閃」の連続攻撃をする技。

斬光閃 型は不明。気を飛ばす技らしい。

拡散斬光閃 四方八方に「斬光閃」を飛ばす技。

滅殺斬空斬魔閃 奥義。剣から巨大な気を飛ばして敵を消滅させる技。

斬魔剣 弐の太刀 一閃 「斬魔剣 弐の太刀」の気を鋭く絞って飛ばす技。

百花繚乱 秘剣。直線状に気を放って敵を吹っ飛ばす技。

飛 風塵乱舞 秘剣。複数の手裏剣を一度に飛ばす技。

斬空掌 気を弾丸のように放つ技。

斬空掌・散 裏八式。複数の気を弾丸のように放つ技。

斬魔掌 弐の太刀 裏七八式。肉体を傷つけず気で服を破く技。

桜楼月華 敵の攻撃を受けながら放つ技。

拳 紅蓮拳 拳に気を乗せて殴る技。

蹴 烈蹴斬 弐の太刀 脚に気を乗せて魔を蹴り断つ技。

投 浮雲・旋一閃 肩を掴んで引きながら足を前に払って、

敵を空中で回転させ、大地に叩きつける技。

浮雲・桜散華 両足で敵の頭を挟み、

後方に反りながら空中で回転して、大地に叩きつける技。

防 四天結界独鈷鍊殻 対魔戦術絶待防御。

独鈷を4本使って三角錐の結界を作る技。

「・・・っふ」

虎雄はすべえ覚えて一息ついた

その後虎雄は外へ出て別荘で特訓したところ・・・
三時間ですべてを完璧に仕上げたそうだ

外伝 千雨と虎雄は・・・？（前書き）

外伝ばかりですいません

私の住んでいるところが地震の被害にあいまして時間がないんです

…（汗）

外伝 千雨と虎雄は・・・？

虎雄は女子寮の前にいた

停電はまだ治っていないようだがそろそろ治るであろう
虎雄は少し急ぎ足で中の千雨のへやに向かった

・・・千雨の部屋の前・・・

虎雄は千雨の部屋の前に付いていた

虎雄は静かに千雨の部屋をノックしていた

「・・・虎雄か？」

「うん、あがらせてもらっていいかな？」

二人は周りにきづかれないように小さな声で話していた
そして千雨はゆっくりと部屋のカギを開けた

虎雄はドアを開け素早く中に入って行った

・・・部屋の中・・・

くちゅぐちゅっ

部屋の中に音が響く

「あん、と、とらおお
」

「なに？千雨
気持ちいかな？」

「う、うん、きもちいい
」

「よかった！
じゃあそろそろ僕のも・・・」

「わかったあ、はむ」

「ん、千雨の口の中、あったかいよ」

・・・なぜこうなったかは10分まえにさかのぼる

10分前

虎雄が入った瞬間に停電が復旧した

「よかった」

何とかばれなかったね」

「ああ、

全く、ひやひやしたぞ」

二人はもういつもど通りの音量で喋っていた

「それにしても夜に二人っきり、か・・・」

「なっ・・・／＼、いきなり変なこと言うな！／＼」

「だってほんとうじゃん？」

それに僕、そろそろ千雨と・・・

いや・・・？」

「いやじゃないけど・・・／＼」

「じゃあいい？」

そっつい虎雄は千雨の顔に顔をちかずける

「あ、ああ・・・／＼」

千雨がそういうと二人はキスをした
そして・・・

こうなつた

「もうっ、いい、よね？」

「ああ、きてくれ、
だけど、やさしく、してくれ」

「うん、いく、よ？」

そして二人は【自主規制】をした

設定 虎雄の指輪（前書き）

主人公設定で何気なく書いていた設定について説明します

設定 虎雄の指輪

右手

親指

・・・・王冠のマークが彫られた金の指輪

ギルガメッシュ（f a t e 版）が憑いている

宝具なども使用できるので王の財宝で媒介を大量に持ち運びしている

人格もそのままだが虎雄だけは主として認めて「帝」と呼んでいる

人差し指

・・・・剣が彫られた青い指輪

アーサー王（f a t e 版）が憑いている

宝具は全て遠き理想郷も含めすべてある

虎雄の作りだすエクスカリバーとはまた違うエクスカリバーを使う

中指

・・・・弓と矢が彫られた紅い指輪

エミヤシロウ（f a t e 版）が憑いている

虎雄も固有結界が使えるようになる

いわゆるパラレルワールドの神話上の人物

薬指

・・・・鬼の顔が彫られた白い指輪

リョウメンスクナノカミの意識の一部が憑いている

パイプはこの指輪につながっている

魔力を流し込めばスクナを少しの間だが召喚できる

小指

・ ・ ・ まがまがしい門が彫られている

魔界とつながっており伯爵級魔族までなら呼べる
魔族も一応掌握できる

左手

ソロモン72柱の指輪が入れ替わる

詳しい説明は登場した時に ・ ・ ・

京都っていったことがないな（前書き）

前回あるおかたに

「シニールです」

と言われたので戦闘シーンを増やし能力などをバンバン使います
でも・・・却本作り使えねー！

チートにしすぎた・・・orz

京都っていったことがないな

「えーと皆さん、

来週から僕たち3・Aは京都・奈良へ修学旅行に行くそーで！」

少年はとても嬉しそうに叫ぶ

「つーか「いくそーで」って知らなかったんかい！」

「もー、準備はすみましたかー!？」

「「「はい?」「」」

クラスのほとんどが大きな声で返事する

そのころ虎雄は・・・

「こら!／＼くつつくなよ／＼」

「いいじゃん」

「・・・・・・」じー

千雨に抱きつきそれを朝倉に睨まれていた

「ネギ先生、上下山くん、学園長が呼びですよ」

「あ、はーい」

「うーい」

そついい虎雄と少年は教室から出ていった

・・・教室・・・

少年が出て行ったあとクラス中は一気に騒がしくなる
その中で朝倉は無言で千雨の席まであるいてくる

「千雨？ちょっと話したいことがあるんだけど」

「朝倉か、良いぞ
廊下にでようぜ」

そついい二人は廊下に出ていく

・・・廊下・・・

「で？話ってなんだ？」

「単刀直入に言うよ？」

私も虎雄の彼女にしてほしい」

「・・・は？」

お前何言ってたんだ？」

「本気だよ？」

「いやでもな

虎雄もOKするかどうか・・・」

「虎雄に言ったら

「千雨にまかせるよ」

っていわれたよ？」

「（おいしいいいい！なんて爆弾持ちかけたんだあ！）」

「で？ダメなの？」

「え？いや、べつに・・・良いけど」

千雨は朝倉の迫力にまけてしまいついOKを出してしまう

「ほんと！？やったあ！！！」

朝倉は両手をあげとんで喜んだ

・・・学園長室・・・

「え・・・？し、修学旅行の京都行きは中止！？」

「へ」

少年はとても残念そうに

虎雄は興味なさげに声を出した

「うむ、京都がダメだった場合はハワイに・・・」

ジジイは代案に説明しようとするが少年はそんなこと耳に入らず壁に寄り掛かる
虎雄は・・・

「ハワイ・・・千雨と朝倉の水着・・・ニヤニヤ」

・・・気持ち悪いのでスルーする

「まだ中止とはきまつたらん
じゃから虎雄も戻ってこい
先方が嫌がつてるだけじゃから」

「先方？市役所とかですか？」

「違うよ少年

先方とは関西呪術協会、

このジジイは関東魔法協会の理事をしていてこの二つの協会は仲が悪いんだ

どうせ魔法生徒と魔法先生がいるとでも言ったら嫌がられたんだろ」

「そ、そうなんですか？」

少年は頭の中で必死に情報整理をしながらジジイに同意を求める

「うむ、そのとうりじゃ

そこでじゃ、わしはそろそろ西との喧嘩をやめたいんじゃ
そのため西へ特使としてネギ君に行ってもらいたいんじゃ」

そついいジジイはどこからか一つの封筒を取り出し

「この親書を西の長に届けてほしいのじゃ
頼めるかの？」

少年はとても良い顔で

「わかりました！」

と答える

「うむ

それでは戻ってよいぞ
虎雄は残ってくれんかの？」

「それでは失礼しました」

そついい少年は学園長室から出ていく

「で？何の用だ？ジジイ」

「うむ、虎雄には修学旅行中のネギ君の護衛を頼みたいのじゃが・

「・」

「却下」

「じゃよな、一応理由は？」

「ん？千雨といちゃいちゃするため」

「は」

ジジイは思わず頭を抱える

「だけど護衛を紹介してやるよ、こい、スクナ！」

虎雄はそういう薬指の指輪に魔力を流し込む
そうすると指輪から小さなスクナが出てきた

「これは・・・スクナかの？」

「ああそうだ

俺が魔力を流し込めば召喚できるし

京都ならばスクナの魔力も多いだろうから常に召喚し続けることが
出来る」

「うむ、それならばおねがいしようかの？」

「わかった

金はいつもの方法でな」

「フオ！？金を取るのかの？」

「当たり前だボケ」

そう言い残し虎雄は学園長室から出ていく

その後

教室に戻ろうとしたところ廊下で朝倉と千雨につかまり半修羅場になりながらも朝倉と付き合つことになった

京都っていったことがないな（後書き）

感想下さい

あと評価も

結果

結果が出ました！

なんと・・・

？の圧勝！

というわけで今から書き始めますのでよろしく！

これより下は文字稼ぎなので気にせず

千雨可愛いよ千雨ええええええええええ

どこが可愛いって？

そりゃあ全部さ！

千雨は世界で一番かわいいんだ！

千雨の為なら僕は死んでも良い！

千雨のあのデレ具合

僕はツンデレはあんまり嫌いなんだ

だけど！あの千雨のデレ具合は大好きだ！

そして！メガネをはずしてちうとしての千雨も大好きだ！

いや、愛していると言った方がいいかもしれない！
とにかく僕は千雨が好きだ！愛している！
え？和美は？もちろん！好きだ！大好きだ！
だが千雨ほどではないような気がする…
でも！好きであり愛していることには変わらない！
和美のあの意地の悪そうな笑顔なんて最高だ！
和美はおぱいも大きいし！
でも千雨みたいな美乳も好きだ！
とにかく！僕は二人を愛している！

スクナの力

刹那が翼を出したところ虎雄は旅館から総本山の方に向かって飛んでいた

「もう復活したみたいだな」

『ふん、あんなもの出来そこないじゃ』

「言葉すら話せないんだもんな」

その隣にはスクナが居た

少年達が総本山に入ったと同時に虎雄のもとへと帰って来たのだ

「さて、ギルガメッシュ聞こえるか？」

《聞こえているぞ帝よ》

虎雄は親指の指輪に話しかける

そうすると頭の中に声が響いてきた

「王の財宝を発動してくれ

番号は1番と7番だけでいい」

《了解したぞ》

そうすると虎雄の指にどこから現れた指輪が現れる

「じゃあ急ぐか」

『《了解した》』

虎雄はスピードをあげ飛んでゆく

総本山ではエヴァがフェイトを殴り飛ばしていた
そしてエヴァがネギに魔法使いの役目を教えていた時に虎雄が到着
した

「ん？虎雄か

何の用だ？久々に暴れたいんだが」

「師匠これ俺に譲って下さいよ」

「は？ダメだ！これは私の獲物だ」

「そこを何とか、俺の血を吸ってもかまいませんから」

「む、そうだな・・・よし、譲ってやろう

ただし覚悟しておけよ？とことん吸ってやるから」

「わかりました」

そうすると虎雄は左手に付けてある指輪に魔力を流し始めた
すると指輪は姿を変えて蛇の尾をもつ狼とひとりの青年が現れた

「二人とも準備は出来ている？」

そうすると二人は無言でうなずいた

虎雄はエクスカリバーを出し青年に与え

「殺さないでね？あくまで力を弱めるだけでおねがい」

二人は虎雄の言葉が終わったと同時にかけだした
狼は空を翔け青年は水上を走りだす

スクナの近くまで行くと狼はやや離れたところで炎を吐きだし
青年は懷までちかずきエクスカリバーを見事な腕前で使いこなして
いる

「おい！なんだあいつらは！とてつもない力だったぞ！」

エヴァは虎雄をものすごい表情で問い詰めていく
すると虎雄は

「狼がソロモン72柱序列7位のアモン、青年の方が同じくソロモン72柱序列1位バアルですよ」

と答えた

するとエヴァは呆れたような表情になり深いため息をつきながら

「お前本気出せば私なんて瞬殺なんじゃないか？」

「それも出来そうですね」

「ほんとにバグだな」

二人がそんな話をしていると

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA」

という叫び声が聞こえた

「そろそろいいか」

そうつぶやくと虎雄は転移魔法を使いスクナの前まで行く

「こい！スクナ！」

虎雄は右薬指の指輪に魔力を込めながらスクナ（出来そこない）に向かい投げつけた
すると指輪はものすごい光を出した

「な、何をしたんや！」

千草は起きていることが分からずに虎雄を怒鳴る
光がおさまるとそこにスクナ（出来そこない）の姿は無く指輪のみが残った

「成功か・・・」

虎雄は指輪を回収しネギたちのもとへ降りていった
戻ると少年が倒れていてこのかがキスをしようとしていたので急いでとめた

「虎雄君？なんで止めるんや！？ネギ君が！」

「落ち着けて俺治せるから」

「ほんま！？なら早く！」

「はいはい」

そういうと虎雄は少年に手をかざし

「ヴォル・ヴァル・ザーク・ヴァルザーク」

大気に漂うマナ達よ

わが名において命令する

かの物の身体のすべてを正常に戻せ

【神の癒し】」

そうすると少年の石化は解け身体の傷もすべて一瞬のうちにすべて治ってしまった

すると少年は意識を取り戻した

次の日（前書き）

感想ください

次の日

次の日の朝

虎雄は総本山の部屋で寝ていた

昨日さすがに遅いので泊まったのだ

その部屋の障子に一つの人影が現れた

その影は静かに障子をあけ部屋の中に入って行った

そして虎雄に飛びかかった

「虎雄！おっはよ～～～！」

「グベフッ」

影は見事に虎雄の腹部に飛び乗り虎雄は思わず奇声をあげる

「いてて、なんだ朝倉か」

そう

その影とは朝倉和美だったのだ

「もう！付き合ってただから和美って呼んでよ」

「はいはい、何の用？和美」

「・・・キャッ」

朝倉は恥ずかしがって顔が真っ赤になってしまった

「恥ずかしがるなら朝倉にするよ？」

「ダメダメ！和美って呼んで？」

「じゃあ和美？何の用なの？」

そうすると朝倉はハツとした表情で

「あ！そうだそうだ

なんで魔法なんて面白いネタ黙ってたの！？」

「面白い？何言ってるの？」

魔法は一步間違えれば人殺しの道具になるんだよ？」

「う！？」

「それに今回は和美だって石化で危なかったらしいじゃん」

「うゝ」

朝倉はシュンとしてうつむいてしまった

虎雄はそれを抱き寄せて

「そんな危ないのに二人を巻き込むなんて出来ないよ」

さつきとは打って変わって優しい声で語りかけた
すると朝倉は泣き出してしまった

朝倉はその後10分ほど泣き続けていたそうだ

「落ち着いた？」

「ウン・・グスッ」

「じゃあ大丈夫だね？」

あと千雨には言わないでね？秘密だよ？」

「え？じゃあ二人だけの秘密ってやつ？」

「いや、魔法自体は少年とかも……」

「やった！二人だけの秘密だ！」

「いや、だから……」

「やった！やった！やった！」

「聞いてないし……」

弟子入り（前書き）

感想下さい

弟子入り

日曜日

少年はエヴァの家に来ていた

少年は虎雄に弟子入りしようとして朝倉に虎雄の居場所を聞いたところここにいると教えられたのだ

「これはネギ先生・

ようこそいらっしました」

「あの

上下山さんはいらっしますか？」

「え！？

あんた虎雄に弟子入りすんの！？

あいつ強いけどエヴァちゃんと一緒にあんたの事襲ってたじゃないの！」

「大丈夫ですよ

何かあったら僕が守りますから」

そういふ二人は茶々丸に招かれて家の中に入って行った

「断る」

即答だった

「ちょっと！なんでダメなのよ！
教えるぐらい良いじゃない！」

明日菜はすぐにそれに食ってかかる

「は、神楽坂お前ほんとにバカだな」

「な！失礼ね」

「そういえばお前は美術部だったな」

「そうだけど何よ」

「たとえばだ」

お前がもう何か月もかけて出来た最高の出来の絵があるとする」

「うん」

「それはもう売れるようなレベルのものだぞ？
それをいきなり現れた人が無料でくれと言って来たんだ」

「む

それはいやかも」

「それと同じさ

魔法というのはその人が苦勞して作り上げた汗と涙の結晶なんだよ」

「うゝ

でも！教えるぐらい良いじゃない！」

「はゝ、それに俺はあくまで師匠の弟子だ

弟子入りなら師匠に頼め

良いですか？師匠？」

「ふむ、虎雄の頼みならしょうがないな

今度の土曜日ここに来い

テストしてやる」

「あ、ありがとうございます！」

そっつい少年は去って行った

試験（前書き）

結構飛びます

試験

日曜日

その日は少年の弟子入り試験の日だった
原作と違い虎雄が相手だが

そして世界樹前にはエヴァと虎雄一行が居た

「師匠？どのくらいハンデ付けます？」

「そうだな、うむ・・・」

エヴァと虎雄は少年相手にどれほどのハンデをつけるか考えていた
当初手錠と足枷をつけるという案だったのだが手錠と足枷が虎雄の
力に負けてしまい大破
結局代案が見つからないまま当日を迎えた

「うゝん…そうだ！」

その時虎雄の脳内にある漫画のワンシーンが浮かんだ
そのワンシーンとは刃牙のオーガがムエタイチャンピオンに付けた
ハンデ

「何か浮かんだのか？」

「ええ！それは・・・」

「それは・・・？」

「僕は指二本しか使わないのです！」

「・・・は？」

「どうしたことだ虎雄？」

すると虎雄はじゃんけんのチョキを作り手頸を曲げ人差し指と中指を交互にまるで足のように動かした

「・・・それはいささかなめ過ぎじゃないか？」

「そんなことはありませんよ」

虎雄は立ち上がり近くに有った岩に人差し指を当てた
するとその岩は一瞬で粉々になった

「・・・」

エヴァはその威力に呆れて放心状態になったがすぐに気が付き呆れながら

「それもだめだ・・・」

もうハンデはいらん
勝利条件を変える」

「了解しました」

「それにしてもそろそろ時間か・・・」

エヴァが時計を確認すると

「エヴァンジェリンさん！」

少年がやってきた

「よく来たなぼーや

では始めよう

その前にルール変更だ」

「え!？」

「虎雄に一撃入れると言う条件だったが勝利条件をもう一つ追加する
虎雄をその場から動かしても合格だ
ただし方向転換はノーカンだ」

「わ、わかりました（あれ？これって僕が有利になったんだよね？）

」

「それと・・・

そのギャラリーはどうにかならんかったんか!？」

「すみません、憑いてきちゃって」

後ろには桜咲、このえ、明石、和泉、大河内、クーフエイ、佐々木、
神楽坂がいた

「ふん！まあいい

虎雄！軽くもんでやれ」

「了解です」

「上下山さん、宜しくお願いします」

「宜しく」

「では、はじめ！」

エヴァの声と同時に少年は突進してくる

それを虎雄は正面から受け切り少年の鳩尾にパンチを入れようとするがその拳を少年はぎりぎりの所で受けその衝撃を利用し虎雄の後ろに回り拳を打ち出すが虎雄はまるで後ろに眼があるかのように掌でその拳を受け止め方向転換し少年の顎に掌体をかます

少年の体はフワツと浮き上がり後ろのギャラリーの所まで吹っ飛ぶ

「「「キヤーー」」」

ギャラリーは悲鳴を上げ少年に駆け寄ろうとするが佐々木に止められる

虎雄からは聞こえないが

ただし虎雄は別の音を聞いている

「キヤー」

「千雨！？」

本当にかすかだが千雨の悲鳴が聞こえたのだ

虎雄は『光化静翔』ですぐに千雨の部屋へ行ってしまった

世界樹前には沈黙が漂っていた

少年は喜んでいいのかわからずに困惑していた

ちなみに悲鳴の正体は千雨が部屋でGを見つけたただだった

試験（後書き）

・・・ごめんなさい

これ以上戦闘描写書けない

修行

あれから数日後

少年の修行の場に虎雄もいた

先日の弟子入り試験の途中で消えた罰として虎雄も少年に教えることになった

エヴァが基礎的なことを教え、虎雄が効率化などの事を教えるようだ
いまはちょうど少年が魔力切れで倒れたところだ
虎雄は興味が無いのか聞きたい流しているが

「おい虎雄！この下等生物に手本を見せてやれ」

「え？何の話ですか？」

「聞いてなかったのか！もういい！とりあえず打てるだけ魔法の射手をうて！」

「でもそんなことしたら師匠の結界壊れますよ？」

「何を言っている？ 結界もお前が張るにきまっているであろう？
とにかく早くしろ！」

そう言われ虎雄は仕方なく対魔・魔法障壁を全力で発動し

「ヴォル・ヴァル・ザーク・ヴァルザーク」

光の精霊3000000000柱 集い來たりて「敵を射て。

『魔法の射手・連弾・光の3000000000矢』！

虎雄が呪文を唱えると虎雄の周りどころか全員の視界が光で埋まってしまうほどの魔法の射手が放たれた

「ん？こんなものか？

もつと打てるはずであろう？」

「まだうてますけど打つとその余波で皆気絶しますよ？」

「そうか…

みたか？これがぼーやの目指す完成形だ

私の前ではどんな泣き言もきかん！覚悟しておけ」

「はい！

よろしくお願いしますエヴァンジェリンさん！上下山さん！」

「ム、私の事はマスターと呼べ」

「俺の事は虎雄さんね」

「はい！マスター、虎雄さん！

ところでマスター

ドラゴンを倒せるようになるにはどのくらい強くなればいいですか？」

「何？ドラゴンだと？

そつだな…虎雄の五十分の一ぐらいじゃないか

おつと、かんたんだとは思うなよ？

虎雄は私を瞬殺出来るのだからな」

「そ、そうなんですか！？」

「では今日ここまで解散！」

「じゃあ俺も失礼します」

「なんだ？用事でもあるのか？」

「いや」

千雨と会う約束をしまして・・・」

「そうか、じゃあな

せいぜいふられ話を切りだされんようにな」

「ちょっと！そんなフラグ立てないで下さいよ！」

そういい虎雄は走り出した

・・・公園・・・

公園には千雨と朝倉がすでに来ていた

「ごめんごめん
遅れちゃったー」

「いや、良いんだそんなこと」

「あゝ、虎雄先に謝っておくよ？ごめんね？」

「？」

「虎雄・・・」

魔法って…何だ？」

「！！千雨…」

告白

「魔法って・・・何だ？」

千雨は公園で虎雄に問いかけた

事の発端は数時間前

朝倉と千雨は二人で買い物に来ていた

虎雄と付き合うようになってから一緒に出かけることが多く成っていてもうよそよそしい雰囲気は無く

とても仲がよく見える

そのせいか、朝倉はつい口が滑ってしまい「魔法」について行ってしまう問い詰められてしまい隅から隅まで喋ってしまったのだ

「！！千雨・・・」

虎雄は怖かった

ばれたから怒られるとかそういうことではない
ばれたせいで千雨がこの世界にかわり危険な目にあうことが怖いのだ

「・・・虎雄はいつから知っていたんだ？」

「・・・千雨と会うちょっと前から」

「そうか、じゃああの周りの異常さの原因も知ってたんだな？
なんで教えてくれなかったんだ？」

「それは・・・千雨がきけんなめに会うのが嫌だったから」

「・・・虎雄は優しいな

でも、私はその方が辛かった

何か隠されているっていうことはしっていたよ

でも言えないことなのかな？って考えるととっても悲しくなった

でも私は虎雄の事が好きだったから信じていたんだよ？でも放してくれなかった」

千雨の顔は涙でグチャグチャだった

「ごめん・・・」

「そのことを朝倉から聞いた時ね、ああ私には話してくれないのに朝倉には話しているんだ、って思った

虎雄は私の事信じていないんだって思うと不安になっちゃったんだよ」

「ごめん」

「ううん

もういいんだよ？

でもね？ちよつと・・・泣いていいかな？」

「うん・・・」

そっつい虎雄は千雨を抱きしめ、千雨は顔を虎雄の胸にうずめ

「う・・・うわああああん

こ、怖かったよ」

虎雄が私から離れていつているような気がして怖かったあ」

「じめん、じめん」

次の日

虎雄と千雨と朝倉はエヴァの家に行った

あの後千雨は泣きやみ『私が強くなれば虎雄の心配はなくなるんだな?』と言い出し

手っ取り早く強くなれる仮契約を進めたところはずかしがりながらもそれに決定

ついでに朝倉も仮契約する事になった

「で?仮契約したいと言うのか?」

「はい、そのためにオコジヨに頼むのは嫌ですし、それに少年に千雨まで巻き込まれたくないです」

「それもそうだな

しょうがない、地下に來い」

「はい、ほら千雨と和美も氣をつけてね？階段急だ変ら」

「「うん」「

そういい地下に行つた

「さて

早く済ませてしまえ

ばーやが來たら面倒なんだろう？」

「はい

どっちからやる？」

「私からやる！」

朝倉が元気よく答える

そうすると床が光り魔法陣が出てくる

「じゃあ・・・ん」

二人はキスをした

すると光は一瞬強く成りカードが出てきた

「じゃあ

次は千雨だね？」

「お、おう」

そっつい千雨は朝倉と入れ替わりに虎雄の前に行きキスをした

「クチュ、クチュ」

・・・キスはキスでも深い方だったが

そのせいで朝倉とまた深いキスをするはめになったが

アーティファクト

長谷川 千雨

称号：恋する電腦アイドル

色調：黒

徳性：節制

方位：中央

星辰性：土星

アーティファクト：電腦世界の野獣たち

電腦世界（未来）にいる電子精霊達の中で強力な部類に入る獣型の電子精霊たちを呼び出すことが出来る
呼び出すた目にはパソコンなどの電子機器を媒介にしなくてはいけないため少々不便

未来の電子精霊なので超のファイヤウオールを破るなど朝飯前
その気になれば動物として実体化できるが活動時間が減る

朝倉 和美

称号：恋する密告者

色調：青

徳性：知恵

方位：東

星辰性：海王星

アーティファクト：全てを知るモノクル

モノクル型のアーティファクト

それを通して見たものの情報を表示することが出来る

それが人物だった場合その人物の五感を感じることが出来る

悪魔

「『雷の斧』！」

いま虎雄の目の前で少年がヘルマンを倒した

虎雄はエヴァとは違う樹の上で少年たちを見ていた
虎雄はかなり怒っていた

理由は朝倉が危険な目にあっていたからである

それでも虎雄は色々と手を回してきた

ヘルマンの侵入を防ぐために警備の数をふやしたり
結界も強化した

それなのに侵入を許した

「トドメは、さしません」

そんなことを考えている内にヘルマンが消えかかっている
虎雄は急いでヘルマンのもとへ降り立った

「なに甘っちょろいこと言ってるのかな？少年」

「か、上下山さん！？なんでここに！？」

「ん？和美が危険だったから

さてギルガメッシュ、Sをとってくれ」

『了解したぞ帝よ

すると虎雄の指にドラゴンの形のした指輪が出てくる

「ヘルマン・・・だっけか？」

「楽に死ねると思うなよ？こい！サタン！！」

すると指輪は黒い玉となり徐々に大きく成り玉から手足が出てき、玉は悪魔となった

「この気配は・・・まさか！サタン様！？」

「え！？サ、サタン！？」

『ふむ、久々に出てきたな』

「サタン、今回の獲物はこいつだ

「楽に殺すなよ？じわじわ痛めつけてから殺せ」

『それは良いがこやつ、そろそろ消えるぞ？』

「大丈夫だ

「俺が特別にパイプを作ってまだいれるようにしているから」

「か、上下山さん！殺しちゃだめです！」

「ん？なんでだい？少年」

「だってこの人六年前に僕の村を襲った時は召喚されただけですし」

「召喚されただけじゃないだろ？」

「命令とはいえ人を殺してきたんだ、それに」

「それに？」

「和美を人質に取ったのが何よりも許しがたい!!」

「「「「は?」「」「」

その時その場にいたもの全てが凍りついた

「えつと

そんな理由で？」

「そんなッて何だそんなッて!!」

『えつと

主殿? わし帰るわ」

「ちよっ! なんでだよ」

こいつ殺さないとパイプとれないんだよ
どうしょ・・・

よし! ヘルマン!」

「なにかね?

殺さないでくれるのかな?」

「しょうがないから死ぬまで和美と千雨の護衛な?
破ったら俺がこの手で殺すから」

「フハハ、了解した
その二人に傷一つつけんよ」

超

クラスの全員が怒られているとき

虎雄はある人物に呼ばれて世界樹前にいた

「まってたヨ

よく来てくれたネ」

「手短にな

この後和美達と出かけるんだからな」

そう呼び出したのは超 鈴音であつた

「わかつたヨ

では単刀直入にいうヨ

私たちの仲間になってほしい」

「断る」

「な！？なんでヨ？

内容もいてないのに」

「どうせ世界征服とかだろ？そんな暇あつたらデートする」

「そ、そう力

ならばせめて準備だけでもてつだてくれないか？」

「報酬は？」

「フフフ

てつだてくれたらこれあげるね！」

そついい超は小さなパソコンとカメラ、ボイスレコーダーを出した

「このパソコンの容量はなんと！300TB！

どんなソフトをつかても快適ネ！

このカメラは今あるカメラ全てを合わせても叶わないぐらい性能がいいネ！

ビデオもとれて引き伸ばしても画質変わらずネ！

このボイスレコーダーもすごいヨ！

最長録音時間は2400時間！音質も最高！ノイズ？何それ？状態ネ！

これらはまほらの技術と私の知識を合わせて作ったものネ！

これをあの二人にプレゼントしたら・・・」

「ぜひ協力させてくれ！」

「こ、心変わり早過ぎじゃないか？まあいいけどネ

じゃあさっそく田中さんのプログラミングでもてつだてもらおうかね」

その後

虎雄は貰った能力の中であまり使わなかった才能をフル活用し田中さんは原作の約三倍になった

前日（前書き）

久々の更新です

前日

世界樹広場には魔法先生が集まっていた

少年はまだ来ていないがガンドルフィーニ等はすでに集まっている
もちろん虎雄もいる

虎雄の周りにはすでに戦闘態勢を整えた魔法先生達がいる

「何のつもりかな？」

「うるさい！おまえだけは許してはいけない悪だ！ここで倒す！」

そついい魔法先生達は詠唱を始める

「へー、やるならいいよ？前みたいになるなよ？」

虎雄は『凍る火柱』を発動し右手に炎を出す

「待たんか！！」

その場に学園長の声が響く

「主らまだ懲りてないのか！」

「ですが！」

「うるさい！虎雄も挑発に乗るな！」

「はいはい」

そんなことをしていると少年が来た

前日2

「え〜つと、なんですかこの空気？」

「フオッフオッフオ、ちよつとの

それよりここに読んだのは他でもない世界樹伝説についてじゃ」

「世界樹伝説？それって確か願い事がかなうとかのですか？」

「そうじゃ、その前に紹介をしていたほうがいいの、
ここにいる全員はこのまほら学園中に散らばる魔法先生・生徒じゃ」

「え？え〜〜〜！？」

「こんなにいたんですか？！」

「うむ

そして話を戻すぞ？

世界樹伝説

あれは本当じゃ

だが世界を手に入れたとか大金がほしいなどの即物的なものでは
だめじゃ

ただし！

恋の願いについての成功率は120%！呪い級の成功率じゃ」

「本当だったんですねあの伝説！すごいな〜」

「じゃがこれはとても危険なことなのじゃ」

「え？」

前日2（後書き）

短くてすいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599q/>

ネギまの世界で大暴れする主人公

2011年5月14日00時33分発行